

P-34

漢方薬服用患者における胃癌発症と大黄の服用歴について

○萬谷直樹¹⁾，小暮敏明¹⁾，伊谷寧崇¹⁾，田村遵一²⁾，嶋田 豊³⁾，寺澤捷年³⁾

群馬大学医学部統合和漢診療学講座¹⁾，群馬大学付属病院総合診療部²⁾，富山医科薬科大学医学部和漢診療学講座³⁾

【目的】漢方治療の中で大黄は長期に使用される場合があるが，いくつかの大黄の成分についてその変異原性（in vitro）が報告されており，大黄は大腸癌や胃癌発生のリスクとなる可能性がある。我々の知りうる限り，大黄の使用と胃癌発生との因果関係を臨床的に調査した論文は見られない。本研究の目的は，胃癌発生患者の漢方薬服用歴を調査することにより，両者の因果関係の有無を推論することである。

【方法】1979～1999年の間に富山医科薬科大学附属病院和漢診療部に通院し漢方薬を服用した患者の中から，病名検索システムを使用して胃癌と診断された患者を抽出した。漢方薬服用前に胃癌を発症した患者や，病理組織学的に胃癌が確認されていない患者は対象から除外した。実際に胃癌と診断された患者が，胃癌発症前に大黄を服用していたかどうかを調査した。

【結果】1979～1999年までの間に，14,616人の患者に種々の漢方薬が処方され，証にしたがって大黄を含んだ方剤も処方された。胃癌発症者10人の患者のうち，2人のみが胃癌発症以前に大黄を服用していたが，残りの8人は全く大黄を服用していなかった。ヘリコバクターピロリ菌感染の有無については，3人にrapid urease testが施行され，1人のみが陽性であった。

【考察】今回の研究では，胃癌を発症した患者のほとんどで大黄の服用歴がなく，他の因子の影響が大きいものと考えられた。たとえ実験的に大黄の変異原性が報告されていても，実際には胃癌の発生にほとんど関与していない可能性が推測された。コントロールのない今回の研究では，胃癌発生に対する大黄使用のリスクを直接調べることはできないが，両者の因果関係を推測するうえで有用な手がかりを与えるものと考えられた。